

学生と社会人の架け橋となる 実践的教育の実践へ

―実学主義を意識して―

犬田 剛

東京農業大学

国際食料情報学部 助教

はじめに

2023年4月に16年間勤務した金融機関から大学教員に転身した著者は、実務経験を活かした教育を重視し、学外の社会人と学生の交流を促進している。具体的な取り組みは大きく二つある。一つは金融機関での実務経験を通じて得た、リスク管理や顧客対応などの知識・スキルを学生に伝え、彼らが実社会で即戦力として活躍できるようにサポートすること。もう一つは、業界の専門家を招いた講演会やワークショップを開催し、学生が専門家への直接質問や学生同士の意見交換を行う場を提供することである。これらについて、担当科目「フードビジネス論」と講義以外の取り組みを通して紹介したい。

1. 担当科目「フードビジネス論」の概要

「フードビジネス論」では、食品産業のビジネスモデルやマーケティング戦略、流通システムなどを広く教えている。講義では、理論的な知識だけでなく実務経験を踏まえた具体的な事例を紹介し、学生が実際のビジネスシーンをイメージしやすいよう工夫を欠かさない。

2. 食品製造業や外食産業について

身近な企業を題材に講義

講義では、食品製造業や外食産業の身近な企業を題材に取り上げる。例えば、国内外の有名食品メーカーやレストランチェーンのビジネス戦略・成功事例を分析し、学生が実際の企業活動を理解できるようにしている。これにより、学生は理論を実践に結びつける力を養える。具体的には、国内の大手乳業メーカーや世界的な乳業メーカーのビジネスモデルやマーケティング戦略を詳しく説明している。また、外食産業の分野について、国内外の有名なレストランチェーンを題材に取り上げ、ビジネス戦略の内容や企業ごとの特徴なども解説する。

3. 業界の関係を具体的に説明

企業間の関係性についても具体的な事例紹介を行っている。例えば、大手コンビニエンスストアと大手商社との関係性を取り上げ、商品の供給チェーンやマーケティング戦略の連携について解説。これにより、学生は業界全体の構造や企業間の協力関係を理解し、ビジネスの複雑さを認識できるようになる。

4. 専門家を招いた講演会やワークショップの実施

「フードビジネス論」の講義以外の取り組みとしては、農業・食品関連業界の専門家を招き、最新のビジネストレンドや技術動向についての講演会やワークショップを開催している。また、学生と専門家（社会人）との直接交流の機会を設けるようにも心がけている。こうした交流を通じ、学生は将来のキャリア形成に役立つ人脈を築くことができ、就職活動やインターンシップの機会を広げていけるはずだ。また、専門家から直接、実際のビジネスシーンでの知識や経験を学ぶことで、理論だけでなく実践的なスキルや知識も習得できる。

おわりに

このように「フードビジネス論」では、理論と実践を結びつけることを重視し、具体的な事例を通じて学生が実際のビジネスシーンをイメージしやすい工夫してきた。また、講義以外にも、専門家を招いた講演会等を積極的に開催し、学生と社会人の架け橋となる取り組みも推進中だ。食品製造業や外食産業の身近な企業を題材に取り上げること、学生は理論を実践に結びつける力を身につけられる。企業間の関係性を具体的に学ぶことで、学生は業界全体の構造や企業間の協力関係、ビジネスの複雑さを理解できるようにもなる。

今後も、学生が実社会で活躍できるよう、実務経験を活かした教育方法を積極的に取り入れ、彼らの成長を支援していきたい。筆者の取り組みを通じ、学生が将来のキャリアに対する明確なビジョンを持てるようになれば幸いである。任期はあと2年だが、教育現場での新たな挑戦を楽しみながら、学生と共に成長していくことを目指している。

学生の自律的な学修を目指して

はじめに

大正大学は、文部科学省の令和2年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」に採択された。この事業を基盤として、本学の建学の理念である「智慧と慈悲の実践」の具現化である「学生が生涯を通じて自己と他者のために努力できる」(神達知純学長) 人材育成を可能にすべく、学部改組やカリキュラム改革を行っている。

この流れの中で、2024年の学部改組により「人間学部」が設置された。本学の人間学部は、1993年に一度設置され、その後の社会、教育等のさまざまな変化に柔軟に対応しながら2020年に募集を停止している。再度人間学部をスタートさせるに当たり、強く意識したのは学生による自律的な学修である。これは建学の理念にも、現代の教育が目指す学生を主体とする教育にも適う目標である。本稿では、人間学部における学生の自

律的な学修を意図した教育カリキュラムについて述べる。

1 大正大学人間学部のルーツ

本学は複数の宗派の集まる仏教連合大学として、1926年に開設された。現在は天台宗、真言宗豊山派、真言宗智山派、浄土宗、時宗が運営に参加し、大乘仏教精神に基づく「智慧と慈悲の実践」を建学の理念とし、「4つの人となる」を教育ビジョンとして示している「図1」。

「図1」にあるように、「4つの人となる」では「慈悲」「自灯明」「中道」「共生」の4つが立てられており、自己、社会のより良い関係を目指すことが示されている。そのため仏教系の大学でありながらも、これらを具体的に探究するために、本学には開設時から「社会事業研究室」があり、専門の講座も開かれていた。そこでは、人とは、社会とは、を探究し、またそれらのより良い状況を作っていくための実践、教育、研究が行われており、



〔図1〕大正大学の教育ビジョン「4つの人となる」

その伝統が100年近く続いている。この過程で、人間とは何か、社会とは何かを仏教も包含しつつ、多様な視点からアプローチしていくための学部として、人間学部が1993年に創設された。ここに本学の人間学部の特徴がある。仏教は人間、社会に強く関心を持ち、仏教者の立場から人間観、社会観を探究し続けている。そこにとどまらず、本学では仏教以外の多様な立場からの人間、社会に関する研究の知見を尊重し、取り入れることで、「智慧と慈悲の実践」をブ

自律的な学修を可能にするための本学部のカリキュラムは、①学びの選択の準備と機会、②部分と全体の統合、③個性に応じた最適化が大きな特徴と言える。③初めに大学の全体カリキュラムについて説明する。「図2」が、大学全体における大学共通教育科目と学部学科の専門教育科目の関連である。特筆すべきは、後期共通教育科目に、自らの目指す人材像に合わせて複数の履修モデルがあることである。具体的な人材育成像が示され、社会に貢献するための知識の修得だけでなく、実際に社会に貢献できるようにするカリキュラムが用意されている。

2

自律的な学修を可能ならしめるプログラム

ラッシュアップする教育を展開してきた。その過程で本学の人間学部は作られている。この多様性を尊重する基盤は、複数の宗派の仏教連合大学として開設されたという開設時の伝統も影響している。このような過程を経て2024年度に新設された人間学部は、「人間科学科」と「社会福祉学科」の2学科で構成されることとなった。



[図2]大正大学の全体カリキュラム関連図

人間科学科では、人間と社会に焦点を当て、社会学、心理学、身体科学を主たる学問領域とする。社会福祉学科は、人間の支援や福祉の増進に焦点を当て、ソーシャルワークやウェルビーイング、社会政策等を主たる学問領域とする。

3 人間学部の教育的特徴

この後期共通教育科目を選択する準備として、前期共通教育科目や、他学部の学問を学ぶ学融合型教育科目が配置されている。学生はこのような学びの経験の中で、自分自身がどのようになりたいか、そのために何を学ぶかを考えることが可能となる。選択までの準備として、多様な視点に基づく学びのプロセスが用意されているのである。

就職について準備を始める2年次の後半にこの後期共通教育科目のガイダンスがあり、相談窓口も設置され、その上で学生はこれらのコースを複数モデルから選択することも、選択しない(学部・学科の学びを優先する)こともできる。

そしてこれらはそれぞれに関連しながら、個別に、または部分と部分や部分と全体の中で、それぞれにユニークな学問領域を展開している。

例えば、人間科学科では心理、社会、身体科学の各知見とライフコースや所属する集団など、社会福祉学科では個別、集団、地域での援助とその背景となる社会政策など、さまざまな視点や組み合わせが考えられる。その中で学生が学びたいことを自ら選択して学ぶ。

つまり本学部は、人間に関連する学問について、部分としての専門だけでなく、各研究領域がそれぞれの学問を尊重し、部分と全体の中から、複眼的、統合的に自分なりの人間学を学び得る学部なのである。これが自律的な学修の基盤となる本学部の特徴である。

4 選択と最適化のためのフィードバック

本学部の教育の特徴として、与えられたカリキュラムを受動的に選択するのではなく、学生個人が自分にとってふさわしいかのフィードバックを得ながら主体的に選択できるカリキュラムが用意されていることが挙げられる。

換言すれば、学生が必要とする情報を適切に提供し、また授業や対話の中で、それが学生にとってどうなのかの振り返りを丁寧に行っている。

人間科学科は、オープンキャンパスに全教員で対応する。これは学問領域が多様であるため、来訪する高校生に関心に応じ、学部・学科の選択をするための情報提供にふさわしい教員が対応できるようにするためである。

人間科学科の

カリキュラムは

次の通りである。

まず1年次に、

人間科学科の軸

となる学問であ

る社会学、心理

学、身体科学の

3つの基礎講座

を開講している。

この意図は、学

生が入学当初に

興味関心を持つ



[写真1]心理学のグループワークの様子(人間科学科)

た学問領域に特化させていくのではなく、視野を広げてもらうことにある。

2年次には、調査法や実験法などの科学的な研究方法について実習を通して体験しながら、さまざまな学問領域を幅広く学修していく。そのような過程で、学生の興味関心を明確化しながら、3年次以降の専門的な学びへと移行していく。

3年次以降の専門的な学びにおいても、学生は既存の学問を選択するのではない。2年次までに培った複眼的な視点を武器として、既存の学問にはない新たな視点で卒業論文の研究を行っていく。すなわち3年次、4年次と学年が進んでいくにつれ、学生は自ら意識しなくとも複眼的な思考を修得していきながら、既存の学問領域の専門家である教員と対話を重ねていく。そこから科学的な方法を適切に用いた新たな視点での研究を生み出していく。このような過程を経て、学生にとって学問が最適化されるだけでなく、学術的にもオリジナリティの高い卒業論文が誕生するのである。

社会福祉学科では、1年次から2年次にかけて、専門職の資格を目指すか、社会のニーズが多様化する中で資

格にとらわれず社会で貢献するための学修をするか、その選択について、入学後の状況も踏まえて丁寧な対話を行う。自分にとっての社会福祉とは何かに向き合うためである。

1年次の基礎ゼミナールにおいて、基礎的な知識の習得、体験的な学び等を踏まえ、多様な領域の卒業生をゲストとして招聘し、具体的なモデルを見せる。その上で複数の教員が個別に面談を行う。2年次には、資格を目指すコースと資格以外の学修をするコースに分かれるが、そこでの学修を踏まえて教員と面談し、他のコースに移ることも可能である。多様な経験や複眼的な視点の獲得、他者のアドバイスによる、学生の揺らぎや調整を尊重したいためである。

3年次には、ここまで選んだコースから、さらに自らが関心のある領域に関して、プロジェクト研究（ゼミ）や、実習、インターンシップ先を選択できる。これらの過程を経るからこそ、4年次の卒業論文が主体的な学修の積み重ねの成果として結実する。

このように本学部では、多様な選択肢の中で選ぶ、選んだ内容を学修する、学修の経験に基づき自分にとってど

うかを考える、その上でさらに自分自身にとっての最適化を行うことを意識した教育を実践している。

さらに両学科とも、2年次の秋学期に3年次以降に参加するゼミ等の選択をする。その過程で後期共通教育科目とも連動し、学生たちは自分の関心や状況に応じ、複層的で多様な選択肢の中で、3年次以降の学びを選択できるのである。



[写真2] 地域での高齢者向けイベント風景 (社会福祉学科)

5 「智慧と慈悲の実践者」として

本学部の目指す学びは、自律的に学びたいことを選び、そこで知識や技能を得て、自身の活躍したい場所を検討する。その経験に基づき、活躍したい場所と自分自身を関連付けながら自らの学修の最適化を行うことである。

そしてその結果だけではなく、学生時代にその試行錯誤をする過程で、自分なりの選択や最適化とは何かを学び、卒業後も社会やライフステージの変化に応じて、または何かしらにつまずいたときに、自律的な選択と最適化をできる人材を養成することである。

本学部の自律的な学びとは、学生を選択を可能な限り最大化するセミナーの教育を一步超え、自分自身で生き方をつくり上げ、人間と社会に貢献する人材を育成する教育への発展を強く意識している。

この教育の意図が達成されることで、多様な「智慧と慈悲の実践者」として、学生が生涯にわたり人間、社会に貢献していくことが、本学部の教育の望みである。